



## 平和、働くこと、そして...

2020 年 8 月 3 日

### **「影と沈黙だけが残った」**

1945 年 8 月 6 日日本の広島に原爆が、8 月 9 日には別の原爆は長崎に投下されました。二つの原爆による空爆で、人類史上で初めてそして唯一核兵器が実戦で使用されました。その悲惨さを、昨年広島と長崎を訪れたフランシス教皇は、「大勢の人が、その夢と希望が一瞬の閃光と炎によって跡形もなく消され、影と沈黙だけが残った」と表現しています。両都市で 15 万人から 24 万 6 千人の人が亡くなり、その大部分は女性や子どもたちを含めた普通の人々でした。原爆が恐ろしいのは、その即時的な殺傷能力だけではありません。多くの被爆者、被爆二世、被爆三世が、健康被害や差別に苦しみ、幸せな日常と未来を奪われました。

広島と長崎への原爆投下から 75 年が経過した今、平和について労働組合の立場から、特に若い皆さんと考えてみたいと思います。

### **「戦争で犠牲になるのは働く人たちだ」**

国際労働機関 (ILO) の設立に尽力したことで 1951 年にノーベル平和賞を受賞したフランス労働運動のリーダー、レオン・ジュオー氏の受賞講演原稿を読む機会がありました。そこには奇しくも昨年カブールを訪れた際、アフガニスタン労働組合のリーダーから聞いた言葉と同じことが書かれていました。アフガニスタンの友人は「戦争で得するのは政府で、犠牲になるのはいつも働く人たちだ」と話してくれました。ジュオー氏はそれと同じセリフの後に「戦争は何百万もの働く人たちの命を奪い、長い年月をかけて築いてきた家や工場を破壊するだけではなく、暴力に対する無力感をもたらし、そして平和、社会正義、幸福に向けて前進する気持ちを鈍らしてしまう」と続けています。

### **戦争の根底には労働問題が**

大多数の人々は、過去も現在もそして未来永劫に、戦争のない平和な世界を望んでいます。ではなぜ戦争は起こるのでしょうか。そして、それをどのように止めることができるのでしょうか。

第一次世界大戦を見てみましょう。19世紀になると、西側諸国は近代的な機械と組織的な大量生産によって、大きな富を生み出すことが可能となりました。生産をまかなう労働力として、多くの労働者が農村部から工業集積地域や炭鉱に移動し、長時間労働、低賃金の搾取的労働条件で働かされ、資本家は安いコストで大量生産を進めて利益を上げていきました。その結果、生産過剰状態が続き、労働者をはじめとする一般の人々の個人消費が伸びないことと相まって、国内だけでは消費しきれなくなり、列強国は海外に市場を求めアフリカやアジア諸国を植民地化していきました。植民地確保は多くの対立を生み、国家間の緊張が増し、世界大戦が始まりました。

それぞれの国で労働者に対して適切な労働条件が保障されて、軍事拡大のための予算の一部が社会保障費等に使われていたならば戦争は起こらなかったかもしれません。2019年の世界の軍事費は1兆9000億米ドル（約204兆円）、冷戦終結以降拡大し続けています。今でも、格差や貧困の主な要因は労働問題であると考えられ、労働者からの経済的社会的略奪が、戦争や紛争そしてテロの原因となっています。労働問題は、単に働く人々の問題だけではなく、世界で抱える問題の中で最難問の一つであり、すべての人々に影響を与えます。それゆえ、労働問題が少しでも改善されれば、関連する多くの問題に曙光が差し込むのかもしれません。

労働者を保護することは、国内法制によって行われます。しかし、自分の国だけが労働条件をあげるのは、国際市場における競争力を削ぐこととなります。それぞれの国が一緒に労働条件を上げていこうという考えが、1890年頃からヨーロッパそしてアメリカの労働組合の間で話し合われるようになりました。その話し合いは、第一次世界大戦中も同盟国か連合国に関係なく続けられ、1919年のベルサイユ条約の調印とILOの設立に導きました。

ILOは、それぞれの国が一緒に労働者の保護を向上させていく取り組みを支援するため、国際労働基準を設定する国際機関です。各国の政府そして使用者と労働者の代表が直接参加し、一日8時間・週40時間労働、妊産婦の保護、強制労働の禁止等々数多くの国際労働基準を作り、各国の政府がそれらの基準を国内法制において遵守できるよう支援しています。

### **「労働者の代表が自由な議論と民主的な決定に参加する」**

不幸にも世界大戦は繰り返されてしまいましたが、第2次世界大戦中の1944年には、世界の政府、使用者、労働組合はILO総会でフィラデルフィア宣言を採択し、より強固な労働問題を統治するシステムを作るための原則を再確認しました。ここでは、そのうちの次の二つに注目したいと思います。

「表現及び結社の自由は、不断の進歩のために欠くことができない。」

「欠乏に対する戦は、各国内における不屈の勇気をもって、且つ、労働者及び使用者の代表者が、政府の代表者と同等の地位において、一般の福祉を増進するために自由な討議及び民主的な決定にともに参加する継続的且つ協調的な国際的努力によって、遂行することを要する。」

普通の人々、つまり仕事に勤しむ、家族や友達と余暇を楽しむ日々をおくる働く人たちは、働きがいのある人間らしい仕事（ディーセント・ワーク）と、失業、けがや病気、障がいあるいは歳を取って働けなくなった時でも安心して暮らすための普遍的な社会保護を望んでいます。新型コロナウイルス感染下の今の状態を鑑みても、私たちがどのような政策を必要としているかよりあきらかになったのではないのでしょうか。

しかし、一方で自らの富をもっともっと大きくしたい、そして他人を支配したいと考える人がいることも否定できません。私たちは、それぞれ違う考えと価値観を持っています。時にはその違いが強調され、それが誰かを排除したり、いさかいの原因にもなっています。だからこそ、すべての異なる考えを包摂し、利害を調整し、全体の利益に導いていくガバナンスが必要となります。とりわけ、リーダーには、異なる人々が直面する課題や現実に入り込み、その人たちの考えを理解することが求められます。しかし、たいていのリーダーは、私たちと同様に、自分が信じていることを認めてくれる人たちに囲まれることを好みます。そして、一部のリーダーは、人々を味方と敵に分断し、敵を差別的な言葉で攻撃することで味方の支持を拡大しています。結果として、民主的な手続である選挙を通じて選ばれたリーダーであっても、普通の人々の声に耳を傾けることなく、一部の取り巻きの意見や財界の実力者の利益を優先することが多々あります。

それゆえ、働く人たち一人ひとりが自由に自らの考えを表現し、労働組合に結集し行動を起こすことが大切になってきます。そして、永続する平和の構築に向けた闘いにおいては、とりわけ核兵器を廃絶に向けた取り組みにおいては労働条件の向上と同様に、「国際的努力」が必要なことは言うまでもありません。そして、労働者とその代表である労働組合が、政府などの圧力に屈することなく、「政府と対等の立場」で「自由な議論と民主的な決定」に参画することが重要です。

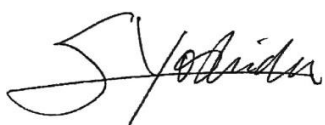
### **社会正義を実現する労働組合**

もとより、労働運動は、社会正義の実現をその目標に掲げてきました。社会正義が意味するものは、場所や時代によって違うかもしれませんが、しかし、どのような場所でもいつの

時代でも、「世の中はこうでなければいけない」、「こんなことが続くのはおかしい」と、人々は「当たり前ではないこと」に対して声をあげ続けます。働く人々はその仕事や生活をめぐって納得のいかないさまざまな問題に声をあげ、持てる力と可能な方法で社会正義を求め社会に訴えかける。大きな困難にぶつかっても、やがては社会はその声に共鳴し、国家や企業を動かしてきました。当たり前な社会への思い、そして戦争のない平和な世界の実現に向けて絶えず行動していくことを必要と感じる人々がいる限り、労働組合はそういった人々の受け皿とならなければなりません。

そのためには、労働組合は、組織化の取り組みをより一層推進することでより多くの働く人々を代表し、民主的な手続きで様々な産業、地域、職場で働く人々の声を取りまとめ政府や使用者との対話に反映させ、いかなる政治勢力や資本の支配から独立した組織でなければなりません。若い活動家のみなさん、皆さんの組織の中で、そして皆さんの国の中で、若者の声をこれまで以上にもっともっと大きく響かせてください。国際労働組合総連合（ITUC）は、皆さんと一緒に、代表的、民主的で独立した労働組合を支援し、働くものの力（Workers' Power）を築き上げていきます。

このメッセージのタイトルを「平和、働くこと、そして...」としました。「そして」の後に、皆さんの大切なもの・人を書いてください。そのことを思い守ろうとすることが平和な世界への一歩になるのではないのでしょうか。



国際労働組合総連合アジア太平洋地域組織

(ITUC-AP)

書記長 吉田 昌哉

Shoya YOSHIDA